

第4章 考察

第1節 初期区画墓と土器棺墓

1. 目的

古川遺跡では、弥生時代前期末～中期初頭の方形周溝墓群を検出した。北河内地域としては初めての例であり、大阪府下では茨木市東奈良遺跡、高槻市安満遺跡、八尾市田井中遺跡、堺市四ツ池遺跡、和泉市池上・曽根遺跡に続いて6遺跡目となる。当遺跡では方形周溝墓が群を構成しており、大阪府下の初期方形周溝墓はこれまで単独でしか検出例がなかったため、今回の発見は重要である。また、当遺跡で重視すべきは土器棺の発見である。東奈良遺跡や池上・曽根遺跡でも、方形周溝墓に伴う弥生時代前期の土器棺¹⁾が検出されているが、東奈良遺跡では方台部から、池上・曽根遺跡では周溝内から発見されている。古川遺跡例は方台部からで、弥生時代前期の土器棺が方形周溝墓方台部に位置する例は、府下において2例目となる。

そこで本稿では、これまでの研究を振り返り、区画墓という概念の整理を試みた上で、そこに介在する問題点を指摘する。この問題点をふまえて、管見にふれた弥生時代の「初期区画墓」を集成し、古川遺跡の意義を検討する。また近畿地方を中心に、弥生時代前期の土器棺墓の様相と比較しながら、方形周溝墓と土器棺墓との関係という視点から、当遺跡土器棺の位置付けを試みることを目的とする。

2. 初期区画墓の研究史と問題点

弥生時代前期の「区画墓」についての研究は、資料数の制約もあって進展してきたとは言えない。しかし、近年弥生時代前期にまで遡る資料が増加しており、これらの資料をめぐって議論がされ始めており、初期区画墓について関心が高まっている。ここでは、区画墓の発生という問題に重点を置きながら、研究史を振り返り、研究の現状を把握し問題点を明確にしてみたい。

学史を概観すると、用語規定の不統一から「区画墓」「周溝墓」「墳丘墓」「台状墓」という用語が乱立した結果、混乱が生じている様子が窺える。初期「区画墓」を考える上では、一体何の「出現」について述べているのか、何が「成立」するのか、どこに「起源」があるのかという点に留意し、統一した概念・用語によって学史を再検討し再認識することが、初期区画墓研究の前提ではないかと考えた。

区画墓の起源についての諸学説については、本間元樹と中村弘によって類型化されている(本間 1997・中村 1998)。これらを総合すると、四つに類型化できると考えられる。以下、これらの諸説について具体的にみていきたい。

ここで、筆者の立場を明確にしておこう。先学の諸定義のうち本間元樹と中村弘の定義(本間 1997・中村 1998)にならい、弥生時代墓制のうち、他と区画された場所に人を葬った墓の大概念として「区画墓」を設定する。次に、これらのうち溝によって周囲と区画され盛土をするものを「周溝墓」とし、それ以外の方法によって周囲と区画し盛土をするものを「墳丘墓」とする。しかし、「遺跡で痕跡として現れる現実においてはその両者を区別し、証明することは難しく、あくまでも概念として理論上存在するもの」(中村 1998)であり、実態は不明瞭である。しかし、周溝の有無という点で各地の区画各墓をあらかじめ区分することは可能ではないかと考える。前述のように区画墓を細分するならば、初期区画墓についての諸説は更に細分して検討する必要が生じる。つまり、前述の四つの説に立つ論者間でも用語が不統一で、解釈が微妙に異なっているからだ。

では次に、具体的に学史をみていくことにしたい。これらの説は墓制の起源→出現→成立→展開という図式で、次のように整理することを提案したい。

1. 区画墓の起源
 - い. 周溝墓の起源 A. 中国
B. 韓半島
C. 日本独自
 - ろ. 墳丘墓の起源 A. 中国
B. 韓半島
C. 日本独自
2. 日本国内での区画墓の出現
 - い. 周溝墓の出現 A. 北部九州説
B. 畿内説
C. 同時多発説
 - ろ. 墳丘墓の出現 A. 北部九州説
B. 畿内説
C. 同時多発説
3. 日本国内での区画墓の成立
 - い. 周溝墓の成立 A. 北部九州説
B. 畿内説
C. 同時多発説
 - ろ. 墳丘墓の成立 A. 北部九州説
B. 畿内説
C. 同時多発説
4. 日本国内での区画墓の展開
 - い. 周溝墓の展開
 - ろ. 墳丘墓の展開

特に「いーい」の問題について、最近韓国忠清南道保寧市寛倉里遺跡で、後期無文土器を伴う計100基の「周溝墓」が群を構成した状態で検出され話題となった。調査者の李弘鐘によれば「周溝墓」とは、平地に墓坑を掘り込んだ後に盛土によって墳丘を構築するか、または平地に盛土をし墳丘を構築した後に墓坑を掘り込んだものの周囲に溝を巡らす墓となり、周溝が円形のもの、方形のものも包括している(李1997)。この定義と日本の周溝墓はほぼ同一の遺構を指すものと理解できる。また李は韓国と日本の周溝墓との関連についてふれている。寛倉里遺跡の周溝墓は紀元前3～紀元前1世紀にかけての時期と考えられる。このことと、兵庫県東武庫遺跡から弥生時代前期の周溝墓が計20基検出され、2号墓周溝から松菊里式系土器が出土したことから、日本の周溝墓の起源は韓半島に求められるとの見解を示した。韓半島に周溝墓の起源を求める上で、有力な事例が提示されたことになる。この発見があるまでは、戦国時代の中国に周溝墓の起源を求める説が多かった(澤田1980・都出1987・藤沢1987・兪1993, 1996)が、今後韓半島での資料が増加することによって韓半島の周溝墓と中国の周溝を有する墳墓との関係が、具体的に検討できる可能性がでてきた。

そこで先述の認識と用語で区画墓の研究史を総括し、これらのうち特に周溝墓の起源と成立の要点を述べ、ここでのまとめとしたい。

まず、周溝墓の起源については、日本独自に発生するのではなく、外的な要素とする意見が主流である。しかし少数ではあるが外的要因ではなく、日本自生のものとし畿内地方に起源を求める意見もある(岸本19

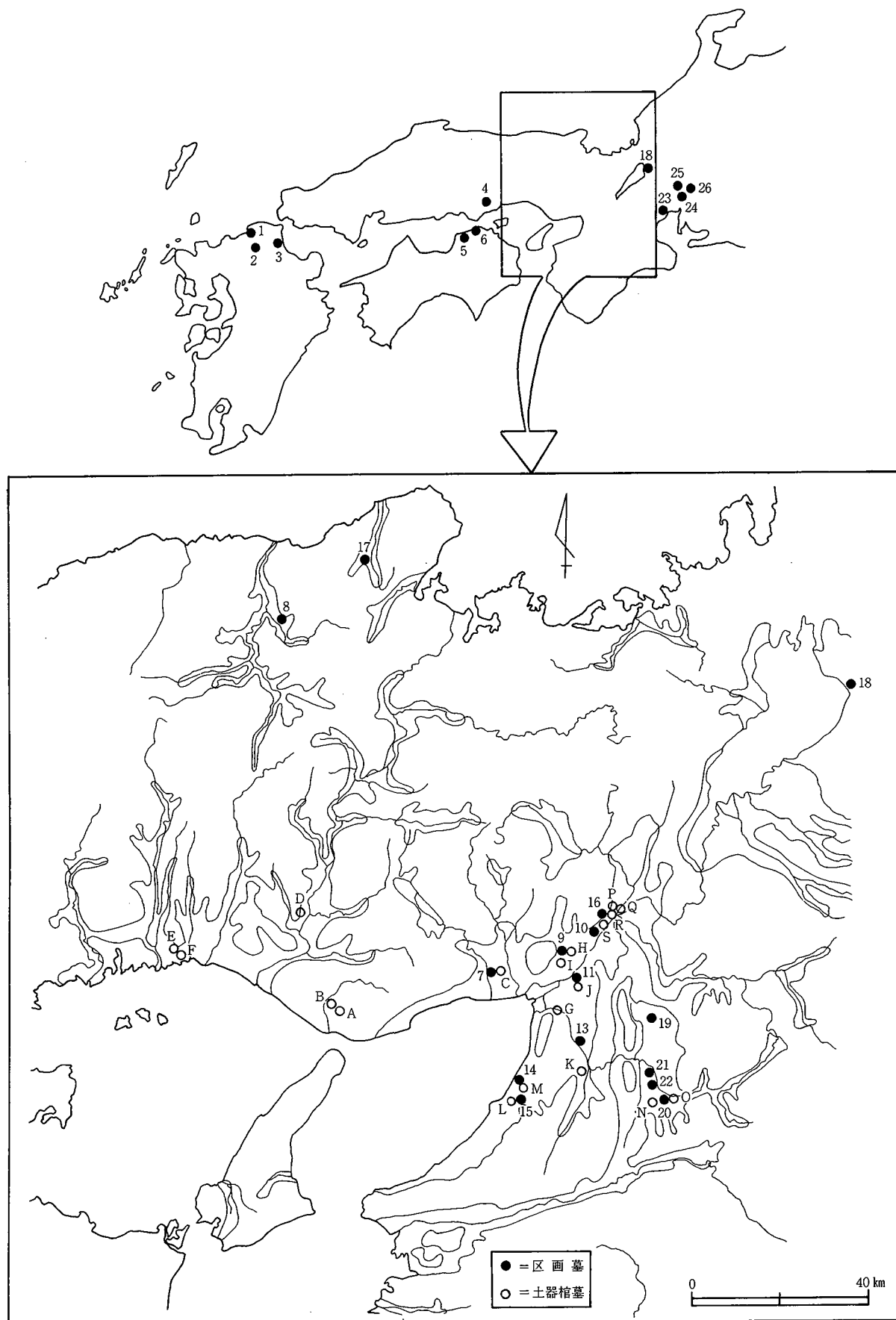


図 23 区画墓と土器棺墓の分布

88)。具体的な地域・時期を、中国の戦国時代に求める説と青銅器時代の韓半島に求める説が有力である。また中国起源説のうちでも、中国から直接韓半島を経由せず、日本に受容されたとする立場（兪 1993,1996）と、中国から韓半島を経由して日本に受容されたとする立場（都出 1987）がある。

出現と成立については、北部九州地方での前期周溝墓例がほとんどないことから、畿内地方に出現し成立したと考える説が有力である（都出 1987・中村 1998）。しかし、福岡県峯遺跡 1 号墳丘墓が弥生時代前期初頭に位置付けられることから、出現を北部九州地方に求め、成立を畿内地方とする説もある（兪 1993,1996）。また近年畿内地方以外の地域から弥生時代前期の周溝墓が発見されるようになり、支持されるようになったのが同時多発説である（服部 1992・丸山 1994・本間 1997）。

3. 初期区画墓と土器棺墓の実態

李弘鐘も指摘するように、初期区画墓の研究は日韓の相互の研究者が自国だけの問題として完結させるのではなく、頻繁な情報交換によって資料が比較検討される必要がある。その作業をおこなうためには日本各地の初期区画墓について、きっちりと基礎的情報を把握しておくことが前提である。初期区画墓については、本間元樹による労作があり、全国的な集成と検討がおこなわれている（本間 1997）。本間によって適切な各属性についての分析がおこなわれており、現状での区画墓研究の一つの到達点と評価できる。詳細はそちらに譲り、ここではその後の事例を加えて分布状況の実態を明らかにしたい。

また周溝墓の発生は周溝墓自体の分析のみでは解決できず、前期の墓域構成、特に他の埋葬施設との対比がこの問題を解決する鍵であるという指摘（鈴木 1975）は、区画墓の事例が近年増加しているとはいえ、区画墓自体の分析結果から導き出される情報に限界がある現状では、弥生時代前期の墓制の中で他の墓制と比較を試みるという視点は高く評価できる。古川遺跡の場合、方形周溝墓 6 の方台部に甕を棺身に転用した土器棺が埋設されていた。埋葬施設は、本来あったと思われる盛土が削平されており、これが今回の調査で確認した唯一の埋葬施設である。そこで、本稿では全国の初期区画墓を近畿地方、弥生時代前期土器棺墓の出現の様相を比較するために集成をおこなった。以下初期区画墓、土器棺墓の順に具体的な様態をみていきたい。

3-1 初期区画墓について（表 2・図 24, 25）

管見にふれた初期区画墓は、26 遺跡 95 基である。区画墓のうちわけは、周溝墓が計 92 基、墳丘墓が計 3 基となる。周溝墓のうち周溝が方形のものは 79 基、円形のものは 13 基ある。ここでは特に本間の集成以降増加した事例についてのみ述べ、個別については表にまとめている²⁾。北部九州地方では福岡県辻垣オサマル遺跡で円形周溝遺構が検出されている（副島 1993）。瀬戸内地方では、香川県佐古川・窪田遺跡で方形 18 基、円形 10 基の周溝墓が計 28 基が、群を構成して検出された（佐藤ほか 1998）。このうち 18 基は弥生時代前期末の可能性がある。本報告はまだされていないが、瀬戸内地方で大規模な群を構成する例は初見である点と、平面形態の異なる周溝墓が群を構成している点が、特に注目される。同様に弥生時代前期末～中期初頭の周溝墓が群を構成する例が、滋賀県塚町遺跡で発見された。こちらは方形のみ 9 基から成り、このうち 7 基が前期に溯るとされる（丸山 1994）。滋賀県で確実に前期まで溯る周溝墓が確認されたのは初めてである点と、長浜市という内陸部での前期周溝墓の事例として注目される。また同じく内陸に立地する奈良県では大福遺跡、伴堂東遺跡といった事例が増加している（萩原 1988・坂, 名倉 1996）。大阪湾沿岸では大阪府東奈良遺跡（広瀬, 亀島 1990）、田井中遺跡（本間, 駒井ほか 1997）、古川遺跡（本報告）、淀川を上って京都府雲宮遺跡

表2 初期区画墓一覧

番号	遺跡名	遺構名	所在地	時期	墳丘規模	文献
1	板付	円墳状隆起	福岡県福岡市	前期末?		中山 1917
2	峯	1号墓	福岡県朝倉郡夜須町	前期初頭	18×13	佐藤 1991
3	辻垣オサマル	円形周溝遺構	福岡県行橋市	前期前葉		副島 1993
4-1	百間川沢田	円形周溝1	岡山県岡山市	前期中葉?		平井編 1993
4-2	"	円形周溝2	"	前期中葉	径5.6	"
5-1	龍川五条	ST01	香川県善通寺市	前期	7.6×6.8	宮崎 1996
5-2	"	ST02	"	前期	径4.6~5.2	"
5-3	"	ST03	"	前期	径5.5	"
6-1	佐古川・窪田	周溝墓1	香川県丸亀市	前期末	7.0×5.5	佐藤ほか 1998
6-2	"	周溝墓2	"	前期後葉	9.4以上	"
6-3	"	周溝墓3	"	前期後葉	5.6×5.0	"
6-4	"	周溝墓4	"	前期末?	7.7×5.6	"
6-5	"	周溝墓5	"	前期末	4.6以上	"
6-6	"	周溝墓6	"	前期末~中期初頭	5.2	"
6-7	"	周溝墓7	"	前期末	9.5×7.3	"
6-8	"	周溝墓8	"	前期末~中期初頭	8.8×8.4	"
6-9	"	周溝墓9	"	前期末~中期初頭	3.0×2.7	"
6-10	"	周溝墓10	"	前期末~中期初頭?	5前後	"
6-11	"	周溝墓11	"	前期末	3.6×2.5以上	"
6-12	"	周溝墓12	"	前期末	3.4×2.1以上	"
6-13	"	周溝墓13	"	前期末	3.8×3.4以上	"
6-14	"	周溝墓14	"	前期末	3.6×2.6	"
6-15	"	周溝墓15	"	前期末	4.6×4.2	"
6-16	"	周溝墓16	"	前期末	5.2×3.5	"
6-17	"	周溝墓18	"	前期末	4.5以上×4.0	"
6-18	"	周溝墓24	"	前期末	5前後?	"
7-1	東武庫	1号墓	兵庫県尼崎市	前期後葉	7.8×6.3	山田編 1995
7-2	"	2号墓	"	前期後葉	7.0×6.0	"
7-3	"	3号墓	"	前期中葉	9.6×7.6	"
7-4	"	4号墓	"	前期中葉	11.4×9.1	"
7-5	"	5号墓	"	前期後葉	3.7×(2.7)	"
7-6	"	6号墓	"	前期中葉	6.8×5.4	"
7-7	"	7号墓	"	前期中葉	5.6×	"
7-8	"	8号墓	"	前期	3.5×3.3	"
7-9	"	10号墓	"	前期後葉	14.0×12.3	"
7-10	"	12号墓	"	前期中葉	6.0×4.0	"
7-11	"	13号墓	"	前期中葉	4.0×	"
7-12	"	14号墓	"	前期後葉	5.8×5.5	"
7-13	"	15号墓	"	前期後葉	16.0×8.5	"
7-14	"	16号墓	"	前期後葉	7.0×6.8	"
7-15	"	17号墓	"	前期後葉	4.3×3.5	"
7-16	"	18号墓	"	前期後葉	5.7×3.4	"
7-17	"	19号墓	"	前期後葉	(6.5)×(3.5)	"
7-18	"	20号墓	"	前期前葉	6.5×	"
7-19	"	21号墓	"	前期後葉	3.8×	"
7-20	"	22号墓	"	前期前葉	4.4×	"
8-1	駄坂・舟隠	4号墓	兵庫県豊岡市	前期後葉~中期初頭	7.3×	瀬戸谷編 1989
8-2	"	7号墓	"	"	7.2×	"
8-3	"	9号墳下層	"	"	"	"
8-4	"	11号墓	"	"	(11)×7.3	"
8-5	"	12号墓	"	"	6.5×(4.2)	"
8-6	"	13号墓	"	"	10.5×(6)	"
8-7	"	14号墓	"	"	(11.3)×	"
8-8	"	15号墓	"	"	(4)×	"
9-1	東奈良	1号墓	大阪府茨木市	前期中葉~後葉		東奈良遺跡調査会 1974
9-2	"	2号墓	"	"		"
9-3	"	4号墓	"	"		"
9-4	"	7号墓	"	"		"
9-5	"	4号方形周溝墓	"	前期	8.5×5.5	広瀬・亀島 1990
10	安満	方形周溝墓14	大阪府高槻市	前期		森田・橋本 1977
11-1	古川	方形周溝墓1	大阪府門真市	前期末	8.0×6.4	本報告
11-2	"	方形周溝墓5	"	"	6.0×	"
11-3	"	方形周溝墓6	"	"		"
11-4	"	方形周溝墓7	"	"		"
11-5	"	方形周溝墓9	"	"		"
13	田井中	方形周溝墓96	大阪府八尾市	前期後葉	12.4×9.3	本間・駒井ほか 1997
14	四ツ池	方形周溝墓	大阪府堺市	前期	(7.5)×(7.0)	津島 1974
15	池上曾根	I-1号	大阪府和泉市	前期後葉	8.3×7.0	第2版和国道内遺跡調査会編 1971
16	雲宮	SD48	京都府長岡京市	前期前葉		中川・田畑ほか 1997
17-1	七尾	方形台状墓Ⅰ	京都府中郡峰山町	前期後葉?		田中・林 1982
17-2	"	方形台状墓Ⅱ	"	前期後葉		"
18-1	塚町	SX01	滋賀県長浜市	前期末	7.5×7.15	丸山 1994
18-2	"	SX02	"	"	5.05×	"
18-3	"	SX03	"	"	4.8×3.9	"
18-4	"	SX04	"	"	3.45×	"
18-5	"	SX05	"	"	4.4×4.2	"
18-6	"	SX07	"	"	10.9×	"

番号	遺 跡 名	遺 構 名	所 在 地	時 期	墳 丘 規 模	文 献
18-7	塚町	SX09	滋賀県長浜市	前期末	9.12×	丸山 1994
19	佐紀	SX16360	奈良県奈良市	前期中葉～後葉	11×9.5	深澤ほか 1995
20	大福	溝1	奈良県桜井市	前期後葉		萩原 1988
21-1	伴堂東	方形周溝墓ST03	奈良県磯城郡三宅町	前期末?		坂・名倉 1996
21-2	〃	方形周溝墓ST06	〃	前期末		〃
22	多	方形区画墓状遺構	奈良県磯城郡田原本町	前期末	7×	寺澤編 1986
23	松ノ木	方形周溝墓11	三重県津市	前期末	9.0以上×6.8以上	竹内 1993
24	朝日	SX140	愛知県西春日井郡清洲町	前期末?	5.0×	石黒ほか 1991
25-1	山中	SZ01	愛知県一宮市	前期後葉	9.8×8.0	服部ほか 1992
25-2	〃	SZ02	〃	〃	10.0×7.0	〃
25-3	〃	SZ03	〃	〃	10.8×10.5	〃
25-4	〃	SZ04	〃	〃	(8.0)×6.7	〃
25-5	〃	SZ05	〃	〃	5.7×4.2	〃
25-6	〃	SZ06	〃	〃	6.5×5.6	〃
25-7	〃	SZ07	〃	〃	6.5×(5.1)	〃
25-8	〃	SZ08	〃	〃	8.4×(6.0)	〃
25-9	〃	SZ09	〃	〃	(9.5)×7.0	〃
26	松河戸		愛知県春日井市	前期		毎日新聞 1996

表3 近畿地方の弥生前期土器棺墓一覧

番号	遺 跡 名	遺 構 名	所 在 地	時 期	立 地	器 種 組 成	埋 葬 状 態	備 考	文 献
A	新方	土器棺	兵庫県神戸市	前期前	B	Ⅳ6	逆位	溝内に成人とともに埋葬	神戸市教育委員会 1997
B	玉津田中	SX24001	〃	前期末	B	Ⅰ4	直位	棺身壺体部に焼成後穿孔	多賀編 1995
C-1	東武庫	5号墓土器棺墓	兵庫県尼崎市	前期末	A1	Ⅰ6	斜位	棺内から石鏃一個出土	山田編 1995
C-2	〃		〃	前期中	E1	Ⅰ6	横位		中村編 1991
D	河高・上ノ池	SX-05	兵庫県加東郡滝野町	前期末	B	Ⅱ6	横位		森下・今 1997
E	袋尻浅谷	第1号壺棺墓	兵庫県揖保郡揖保川町	前期後	B	Ⅰ6	斜位		松本・加藤 1978
F-1	半田山	土器棺墓1	〃	前期末	B	Ⅰ5	斜位		渡辺ほか 1989
F-2	〃	土器棺墓2	〃	〃	B	Ⅰ6	斜位		〃
G	長原	土器棺墓2	大阪府大阪市	前期前	B	Ⅰ1		土器片により側壁と蓋を構成	松尾ほか 1983
H	耳原	16号壺棺	大阪府茨木市	前期後	E1	Ⅱ2	横位		奥井 1982
I	東奈良	1号壺棺	〃	前期中	A1				中村 1998
J	古川	方形周溝墓6土器棺	大阪府門真市	前期末	A1	Ⅱ8			本報告
K	国府		大阪府藤井寺市	前期中	E1	Ⅱ2	斜位	棺身壺体部に焼成後穿孔	石神 1972
L	池上曾根		大阪府和泉市	前期	A2				第二阪和国道内通調査会編1971
M	浜寺黄金山		大阪府堺市	前期					森・田中 1953
N-1	坪井	土器棺墓1	奈良県橿原市	前期前	B	Ⅱ4	斜位		斎藤・松本 1995
N-2	〃	土器棺墓2	〃	〃	B	Ⅰ6	斜位		〃
N-3	〃	土器棺墓3	〃	〃	B	Ⅱ4	斜位		〃
N-4	〃	SK-14	〃	前期末	B	Ⅰ2	斜位	縄文晩期系土器を棺に転用	松本 1997
N-5	〃	SK-17	〃	〃	B	Ⅰ6	横位	同一土坑に棺二個を埋設	斎藤・松本 1995
N-6	〃	SK-17	〃	〃	B	Ⅰ6	横位	〃	〃
O	大福	土器棺1	奈良県桜井市	前期後	E1	Ⅰ1			亀田編 1978
P	鴨田	壺棺SX14306	京都府向日市	前期中	E1	Ⅰ1	斜位		山中 1987
Q	鷺冠井	土壘SK21871	〃	〃	E1	Ⅰ6			國下ほか 1997
R	開田	壺棺墓	京都府長岡京市	〃	E1	Ⅱ1	横位		福永 1991
S	雲宮	SX29719	〃	前期	E1				小田桐 1994
T	中臣	壺棺墓	京都府京都市	前期				群を構成しているか?	林屋編 1983

(中川, 田畑ほか 1997)と事例は増加した。また詳細は不明であるが、愛知県松河戸遺跡で貼石を有する周溝墓が発見されている(毎日新聞 1996)。

3-2 土器棺墓について(表3・図26, 27)

近畿地方で弥生時代前期の遠賀川系土器を使用する土器棺墓は³⁾、20遺跡27例が管見にふれ、丹念にみていくと弥生時代前期の土器棺墓は一定量存在していることがわかる。表3には筆者の設定した項目、立地、棺の器種組成、埋葬状態も併記している⁴⁾。これらの項目別にみていく。立地はA1類が3例、A2類が1例、B類が13例、E1類が8例となる。器種組成は、I類についてはI1類が3例、I2類が1例、I4類が1例、I6類が7例である。II類についてはII1類が1例、II2類が2例、II4類が2例、II6類が1例である。IV類についてはIV6類が1例である。埋葬状態については、直位が1例、横位が6例、斜位が10例、逆位が1例である。

4. 初期区画墓と土器棺墓をめぐって

前章では初期区画墓と土器棺墓について個別に様相を概観した。次にこれらの二つの墓制の関係について検討を行ってみる(図23)。

区画墓全体では、北部九州地方で3遺跡、瀬戸内地方で3遺跡、近畿地方で16遺跡、東海地方で4遺跡となる。この結果からも、従来から指摘されていたように近畿地方の遺跡数が最も多い。しかし、他の地域でも事例は増加しており、均等な分布状況を示していることがわかる。遺構の削平のため、詳細な検討は現段階では困難ではあるが、周溝墓では主体部、周溝形態、平面形態などで出現当初からかなりの地域差が認められるようだ。これらの差異の背景は、渡来人集団の差異が反映されたのではないかとの説(本間 1997)が提示されているが、筆者も概ねこの説に賛成でき、周溝墓の出現と成立は多元的であると考えたい。

次に近畿地方の弥生時代前期土器棺墓の分布を周溝墓との関係という観点からみてみたい。土器棺墓全体では日本海側には分布せず、瀬戸内海、大阪湾沿岸やその周辺に集中して分布していることがわかる。土器棺墓のうち他の墓制との関係をみると、近畿地方では周溝墓と関係し、方台部や周溝に設置される場合が4例ある。また土器棺のみ単独で存在する場合が7例ある。また、土坑墓と関係し群を構成するものが13例ある。周溝墓の方台部や周溝に埋設するのは、弥生時代前期では近畿地方のみで見られる現象である。特に畿内の大阪湾沿岸にのみ分布している事実は意義深い。

弥生時代の土器棺墓についても区画墓同様に、その起源→発生→成立→展開というレベルでそれぞれについて検討をする必要がある。弥生時代土器棺墓の起源についても、いくつかの説が唱えられている。土器棺墓については区画墓とは異なり、この墓制の起源を外的要因ではなく内的な問題として考える説が、現状では優勢である。つまり縄文時代後期から多く見られるようになる「埋甕状遺構」や、「土器棺墓」にその源流を求める考えである。中国大陆には戦国時代に「子供」用の甕棺(土器棺)が多く見られる。しかし、韓半島では青銅器時代の土器棺は数が少ないことから、起源を稲作の伝播と直接結び付けて考え難い状況に起因するのであろう。日本での土器棺墓の発生と成立の地としては、北部九州地方説(橋口 1992, 坂本 1994)が最も有力であるが、伊勢湾沿岸との関係とみる説(小林 1951)も看過できない。いずれにせよ、弥生時代前期の土器棺墓は、北部九州地方の成人用甕棺の祖型となるものと、伊勢湾周辺地域の条痕文土器を使用する「合口」状のものの両者の数が圧倒的に多く、近畿地方では数量的にこれらと比しては少ないが、一定量が存在しうることが判明した。また周溝墓と関係した土器棺が畿内の大阪湾沿岸には今回の集成結果では、

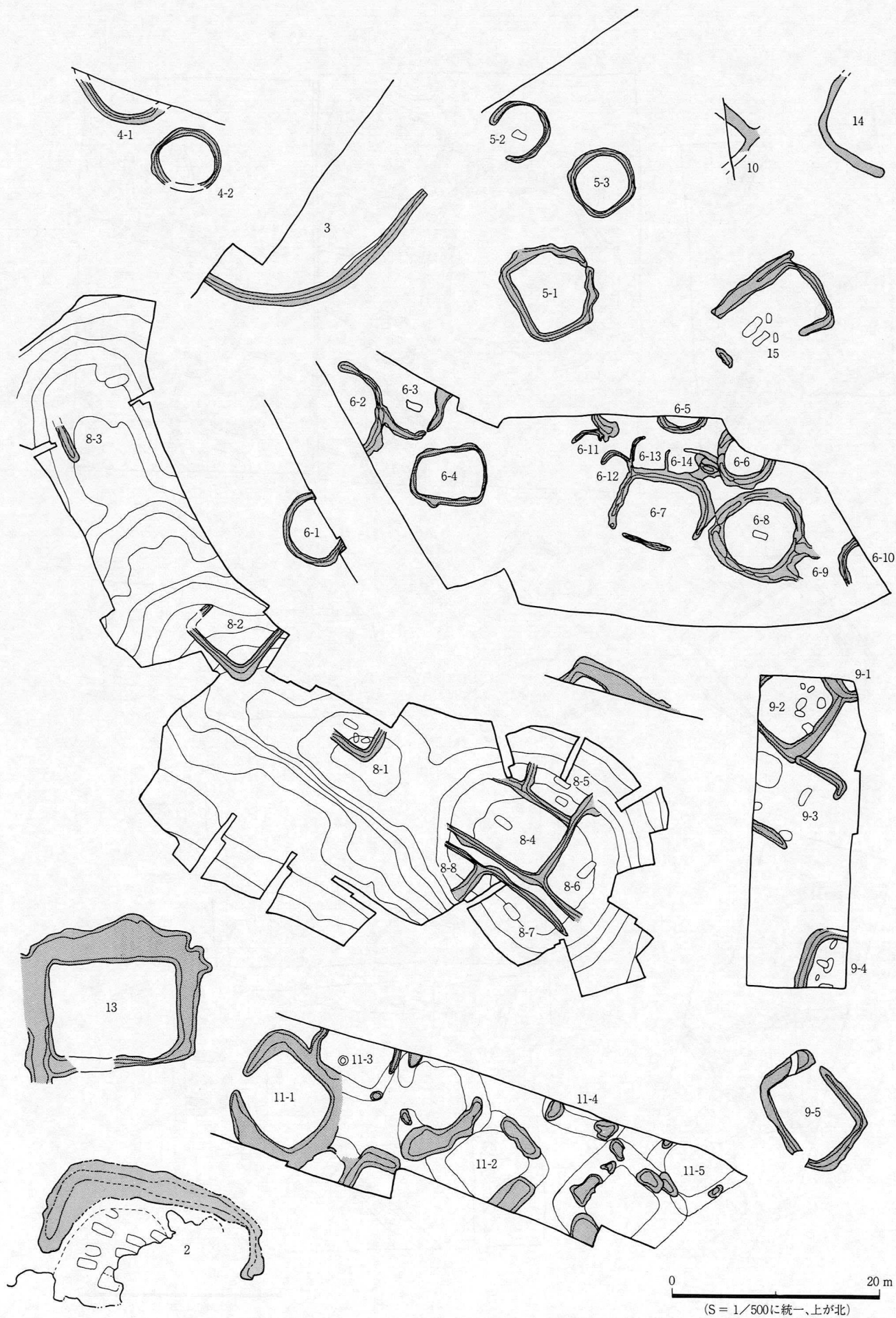


図 24 弥生前期の区画墓集成(1) (本間1997を参考に各文献より作成)

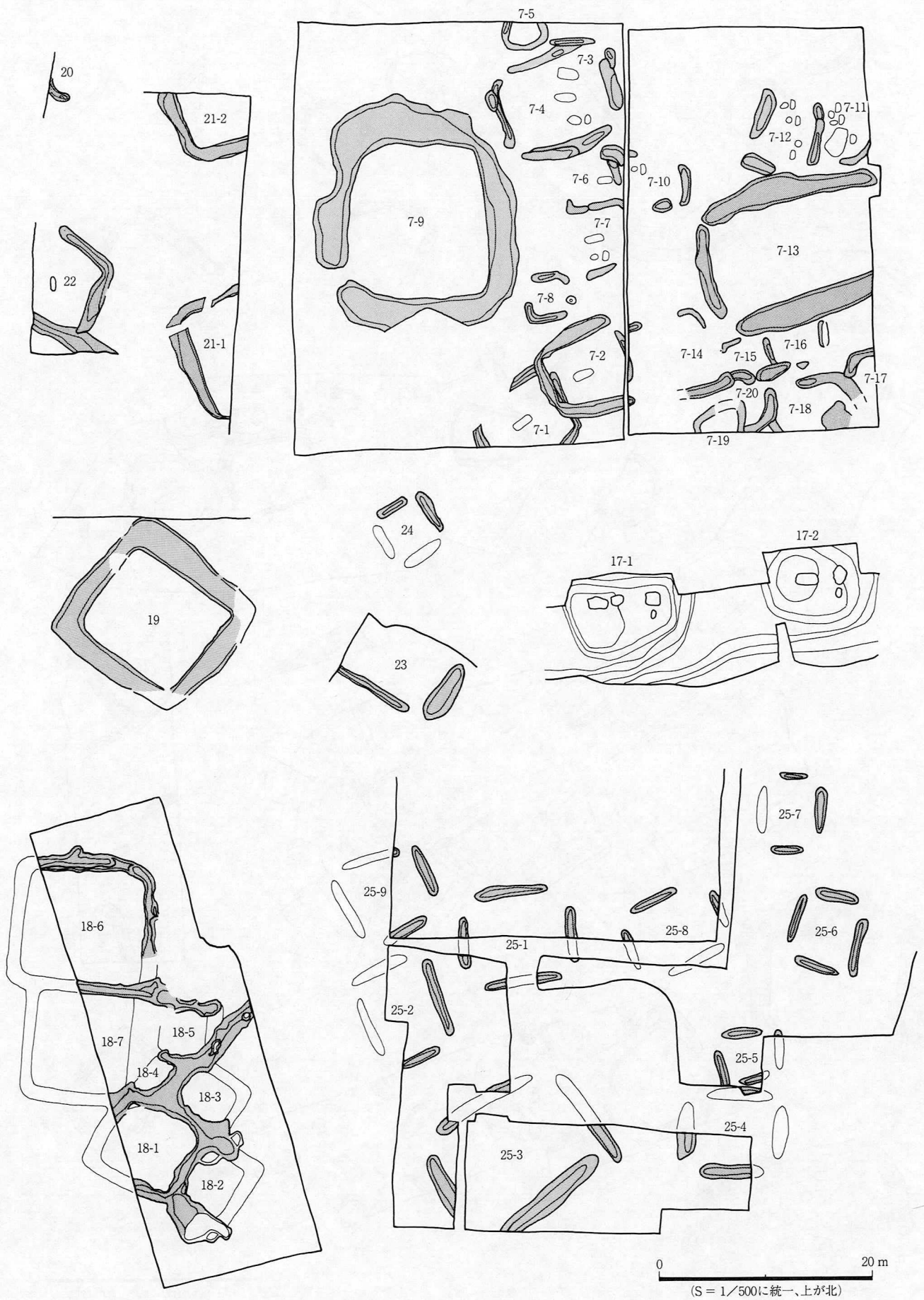


図 25 弥生前期の区画墓集成(2) (本間1997を参考に各文献より作成)

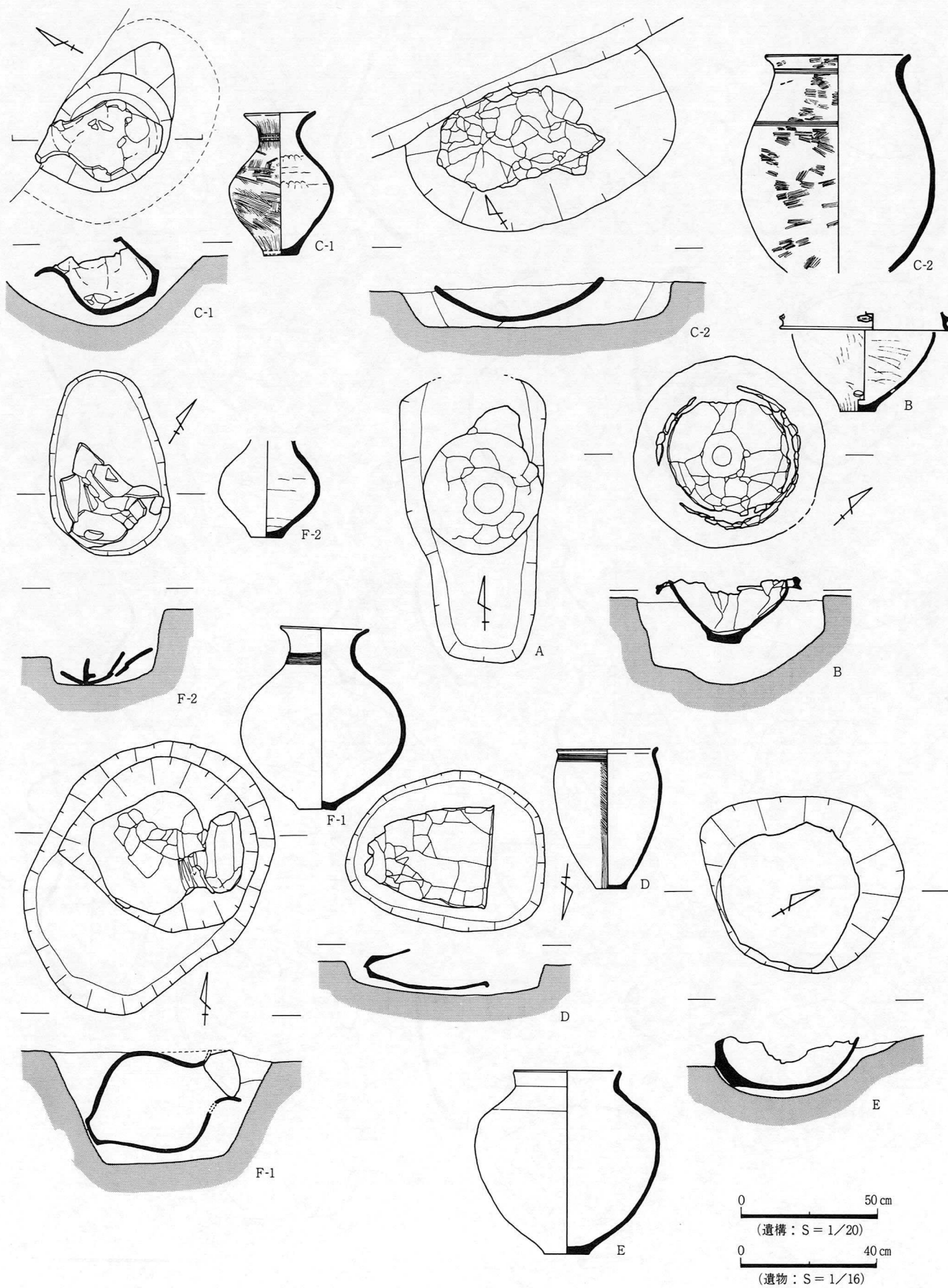


図 26 近畿地方の弥生時代前期土器棺(1) (各文献より作成)

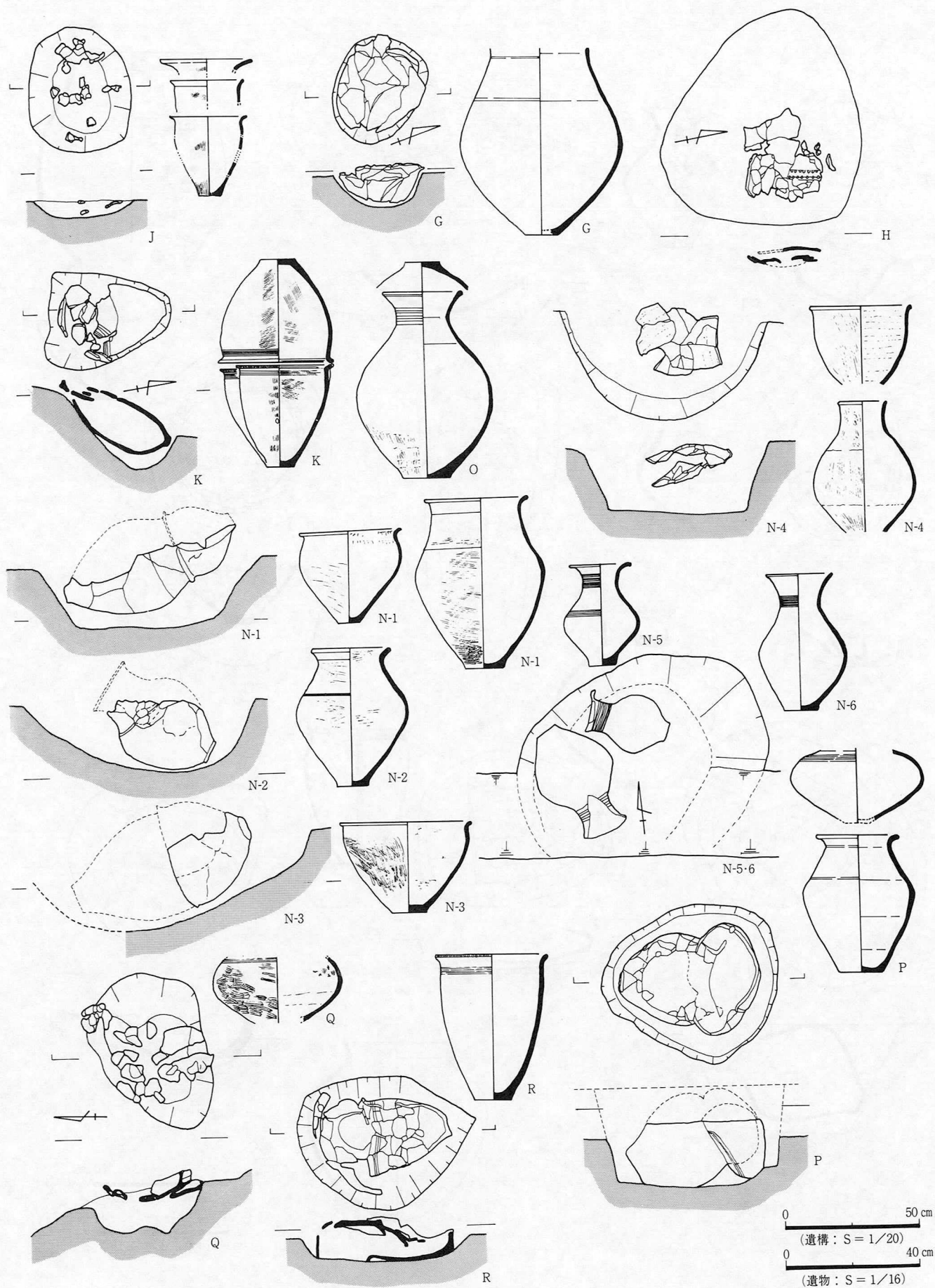


図 27 近畿地方の弥生時代前期土器館(2) (各文献より作成)

ある一定数は存在していたようである。しかし前述の寛倉里遺跡周溝墓の発見によって、周溝墓の起源が韓半島である説が一気に浮上したように、今後韓国での調査によって、周溝と関係する青銅器時代の土器棺が発見される可能性もある。

周溝墓と関係する土器棺墓の時期は、前期中葉から末のものである。これに対して畿内最古と考えられる土器棺は、弥生時代前期前半とされる兵庫県神戸市新方遺跡例である。この土器棺は溝状遺構に倒立した状態で鉢を埋設しており、溝内には他に成人2体が埋葬されていた（神戸市教育委員会 1997）。近畿地方での土器棺墓と周溝墓出現時の形態差を考える上で、先の周溝墓と関係する土器棺の事例と比較してみると、興味深い。周溝墓や土器棺墓の出現時での混沌とした様子が窺える資料である。

以上のように、周溝墓と土器棺墓の分布という視点から、弥生時代前期の近畿地方の様相を検討してみた。両者の分布は、大阪湾沿岸とその周辺に集中するという点で一致している。しかし、周溝墓の発見例がない播磨で土器棺墓が分布したり、土器棺墓の発見例のない兵庫県豊岡市や滋賀県長浜市で周溝墓が分布していたりという齟齬も来している。これらの地域で、それぞれどのような人々が新たな墓制を採用し、周溝墓や土器棺墓が出現したのかということの背景を考えることが必要である。

5. おわりに

古川遺跡で検出された初期方形周溝墓群と土器棺を手掛かりとして、全国の初期区画墓と近畿地方弥生前期土器棺墓との実態を把握し、具体的に近畿地方ではこの二つの墓制がどのように分布し、関係しているのかを簡単に検討した。この結果、ほぼ両者の分布は一致し、古川遺跡の立地する大阪湾沿岸部に両者の分布は集中することがわかった。この結果からも、今後大阪湾沿岸では初期区画墓や初期土器棺墓の発見が期待できる。また、周溝墓の起源の問題については、韓国寛倉里遺跡周溝墓群の発見から、韓半島に求める説が支持されつつある。日本での出現・成立については、同時多発説が有力である。日本的文化の成立とみなされる弥生時代の墓制を考える上で、環東アジア的視点が必要となってきた。現在の我々の価値観・歴史観による日本の境界から考古資料を考えるのではなく、トランスポジションの視座から文化や歴史を考えていくことにより、これまで見落とされていた事実が認識されるのではないかと考える。（文章中敬称略）

謝辞 本稿をなすにあたって、以下の諸氏・諸先生から御教示と資料の提供を受けた。記して感謝します。稲田望子、林志暎、大庭重信、大森 円、金 漢相、岸本一宏、駒井正明、田畑直彦、中川 寧、林 大智、深澤芳樹、本間元樹、三好孝一（順不同・敬称略）

（角南）

【註】

- 1) 本来は墓制としての「土器棺墓」という語という、周溝墓や古墳の主体部として埋葬用に土器が使用されている場合の、葬法としての「土器棺」という語が存在するが、本文中では混乱を回避するためあえて用語は統一していない。
- 2) 鳥根県飯石郡頓原町門遺跡では貼石を有する円形周溝墓1基が検出されている。しかし周溝と埋葬主体部から出土したのは、縄文時代晩期の浅鉢土器、深鉢土器、磨製石斧、石鏃、叩石などである。かなりの削平を受けているため、出土遺物の時期にこの遺構を帰属させてよいのかどうか疑問である。貼石を有する点、平面形態が円形を呈する点、縄文時代晩期には他に周溝を配する墓が未発見である点などから、削平された円墳に縄文時代晩期の遺物が混入したとも解釈できる。しかし、縄文時代晩期並行期には韓半島で周溝墓が出現している点と、瀬戸内地方では弥生時代前期末の周溝墓の平面形態に円形を呈するものが多い点などから、縄文時代晩期の遺物がこの円形周溝墓に伴うものとも

解釈できないわけではない。ここでは、どちらの解釈が適切かの判断は保留しておくが、今後西日本地域のどこかで同様の事例が増加するかもしれないため、あえてこの事例を無視せず、この場で取りあげてみた。

3) 土器棺・土器棺墓の諸属性については、前稿に基本的に従うが(角南・山内 1998, 角南 1999)、対象地域を拡大するにあたって要所で改訂をおこなっている。本稿で問題とする、立地・棺の器種組成・埋葬状態についてあげておく。

《立地》

A類—方形周溝墓・円形周溝墓と立地上関係するもの

A 1—方(円)形周溝墓の主体部として埋置されたもの

A 2—方(円)形周溝墓の溝内・溝底に埋置されたもの

A 3—方(円)形周溝墓に隣接して埋置されたもの

B類—土坑墓と立地上関係するもの

C類—墳丘墓と立地上関係するもの

C 1—墳丘墓の主体部として埋置されたもの

C 2—墳丘墓の盛土・墓坑内に埋置されたもの

D類—古墳と立地上関係するもの

D 1—古墳の主体部として埋置されたもの

D 2—古墳の墳丘隅に埋置されたもの

D 3—古墳の周溝内に埋置されたもの

D 4—古墳に隣接して埋置されたもの

E類—単一墓制(他の墓制と立地上関係しないもの)

E 1—単独

E 2—複数

F類—住居跡の覆土中・床下・周辺に埋置されたもの

G類—支石墓と立地上関係するもの

H類—箱式石棺墓と立地上関係するもの

《器種組成》

I類—棺身に壺を使用するもの

I 1—棺蓋に壺を使用するもの

I 2—棺蓋に甕を使用するもの

I 3—棺蓋に高杯を使用するもの

I 4—棺蓋に鉢を使用するもの(台付鉢も含む)

I 5—棺蓋に石を使用するもの(板石・河原石等)

I 6—棺蓋が無いもの(=単棺)

I 7—棺蓋が不明であるもの(削平・攪乱などを受けている)

I 8—その他

II類—棺身に甕を使用するもの

II 1—棺蓋に壺を使用するもの

II 2—棺蓋に甕を使用するもの

II 3—棺蓋に高杯を使用するもの

II 4—棺蓋に鉢を使用するもの(台付鉢も含む)

Ⅱ 5－棺蓋に石を使用するもの（板石・河原石等）

Ⅱ 6－棺蓋が無いもの（＝単棺）

Ⅱ 7－棺蓋が不明であるもの（削平・攪乱などを受けている）

Ⅱ 8－その他

Ⅲ類－土器蓋土坑墓

《埋葬状態》

ほぼ直立なものを正位、墓坑に対して横に置かれているものを横位、棺が天地逆に置かれるものを逆位、それ以外を斜位とする。

4）兵庫県神戸市雲井遺跡では突帯文土器壺を使用した弥生時代前期初頭まで下る可能性のある土器棺が検出されているが（丹治編 1991）、今回は遠賀川系土器のみを棺身に使用した土器棺墓を扱ったため含めていない。ただし、奈良県坪井遺跡SK-14では、弥生時代前期末と考えられる「縄文晩期系土器」を使用した土器棺墓が発見されている。報告によれば、突帯文土器の系譜を引くものが、弥生時代前期末段階まで残存したと解釈している（松本 1997）。こちらは、弥生時代前期末という時期を考慮して集成に含めた。

【引用・参考文献】

- 李 弘鍾 1997 「寛倉里周溝墓」 高麗大学校埋蔵文化財研究所・韓大宇
- 齋 偉超 1993 「方形周溝墓と秦文化的関係」『中国歴史博物館館刊』21
- 齋 偉超 1996 「方形周溝墓」『季刊考古学』 雄山閣
- 石黒立人 1987 「伊勢湾周辺地方における方形周溝墓出現期の様相」『マージナル』7 愛知考古学談話会
- 石田英一郎 1969 「日本文化論」 筑摩書房
- 太田好信 1998 「トランスポジションの思想」 世界思想社
- 小熊英二 1995 「単一民族神話の起源」 新曜社
- 小熊英二 1998 「日本人の境界」 新曜社
- 姜 仁求（金井塚良一訳）1995 「周溝土墳墓に関するいくつかの問題」『土曜考古』19 土曜考古学会
- 岸本一宏 1987 「畿内弥生社会構造に関する一考察」『文化史論叢』上 創元社
- 岸本一宏 1988 「近畿地方の弥生時代墳丘墓について」『網干善教先生華甲記念 考古学論集』 網干善教先生華甲記念会
- 岸本道昭 1998 「播磨の周溝墓-円形優位の地域色-」『小神辻の堂遺跡』 龍野市教育委員会
- 小林行雄 1951 「日本考古学概説」 東京創元社
- 坂本嘉弘 1994 「埋甕から甕棺へ」『古文化談叢』32 古文化研究会
- 澤田大多郎 1980 「方形周溝墓の展開」『東アジア世界における日本古代史講座』 学生社
- 鈴木敏弘 1975 「畿内地方における方形周溝墓の展開」『原始古代社会研究』2 校倉書房
- 角南聡一郎・山内基樹 1998 「兵庫県下の土器棺・土器棺墓」『播磨大中遺跡発掘調査報告書』 播磨町教育委員会・奈良大学文学部考古学研究室
- 角南聡一郎 1999 「西日本の土器棺墓と埋葬遺体」『奈良大学大学院研究年報』4 奈良大学大学院
- 田中清美 1986 「近畿弥生社会の墳墓」『早良王墓とその時代』 福岡市立歴史資料館
- 都出比呂志 1987 「方形周溝墓について」『古墳発生前後の古代日本』 大和書房
- 中村 弘 1998 「近畿地方における方形周溝墓の出現」『網干善教先生古稀記念 考古学論集』上 網干善教先生古稀記念会
- 橋口達也 1992 「大形棺成立以前の甕棺の編年」『九州歴史資料館研究論集』17 九州歴史資料館
- 服部信博 1992 「墓制」『山中遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 藤沢真依 1987 「近畿地方の方形周溝墓」『文化史論叢』上 創元社
- 本間元樹 1997 「弥生時代前期の区画墓」『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 松本洋明 1997 「大和の方形周溝墓」『みずほ』21 大和弥生文化の会

丸山雄二 1994 「塚町遺跡の方形周溝墓に関する一考察」『塚町遺跡Ⅵ・Ⅶ』 長浜市教育委員会

水野正好 1972 「古墳発生の理論（１）」『考古学研究』18-4 考古学研究会

森井貞雄 1995 「墓制の変化（二）」『弥生文化の成立』 角川書店

山岸良二 1981 『方形周溝墓』 ニューサイエンス社

山岸良二 1994 「稲作を伝えた人々の墓」『古代日本の稲作』 雄山閣

山田清朝 1995 「第1節 周溝墓」『東武庫遺跡』 兵庫県教育委員会

【区画墓関係文献】

内田律雄 1996 『門遺跡』 鳥根県教育委員会・鳥根県埋蔵文化財調査センター

佐藤正義 1991 「原始時代の夜須地方」『夜須町史』 夜須町

佐藤竜馬ほか 1998 「3 佐古川・窪田遺跡」『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度』（財）香川県埋蔵文化財調査センター

瀬戸谷 皓編 1989 『駄坂・舟隠遺跡群』 豊岡市教育委員会

副島邦弘 1993 「一般国道10号線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第1集 辻垣ヲサマル遺跡」 福岡県教育委員会

第2 阪和国道内遺跡調査会 1971 「昭和46年度 第2 阪和国道遺跡発掘調査報告書」4 第2 阪和国道内遺跡調査会

田中光浩・林和広 1982 「七尾遺跡発掘調査報告書」 峰山町教育委員会

津島彰夫 1974 「現地説明会要旨 第一回」 四ツ池遺跡調査会

寺沢 薫編 1986 「多遺跡 第11次発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報 1985年度（第2冊分）』 奈良県立橿原考古学研究所

萩原儀征 1988 「大福遺跡サンサイベ地区発掘調査概報」 桜井市教育委員会

服部信博ほか 1992 「山中遺跡」 （財）愛知県埋蔵文化財センター

坂 靖・名倉 聡 1996 「磯城郡三宅町伴堂東遺跡」『奈良県遺跡調査概報 1995年度（第1冊分）』 奈良県立橿原考古学研究所

東奈良遺跡調査会 1977 「東奈良遺跡第7 回現地説明会資料（G-四-G・K地区）」

平井 勝編 1993 「百間川沢田遺跡3」 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会

広瀬雅信・亀島重則 1990 「東奈良遺跡発掘調査概要・Ⅱ」 大阪府教育委員会

深澤芳樹ほか 1995 「Ⅰ-1 右馬寮の調査」『1994年度 平城宮跡発掘調査部調査概報』 奈良国立文化財研究所

本間元樹・駒井正明ほか 1997 「田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）」（財）大阪府文化財調査研究センター

丸山雄二 1994 「塚町遺跡Ⅵ・Ⅶ」 長浜市教育委員会

森田克行・橋本久和 1977 「安満遺跡発掘調査報告書」 高槻市教育委員会

中川和哉・田畑直彦ほか 1997 「京都府遺跡調査報告書」 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

毎日新聞 1996.8.14 「「張り石」の方形周溝墓を確認」

竹内英昭 1993 「Ⅲ 松ノ木遺跡」『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター

宮崎哲治 1996 「龍川五条遺跡」 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

山田清朝編 1995 「東武庫遺跡」 兵庫県教育委員会

【土器棺墓関係文献】

石神 怡 1972 「国府遺跡発掘調査概要」Ⅱ 大阪府教育委員会

奥井哲秀 1982 「耳原遺跡発掘調査概報」 茨木市教育委員会

小田桐 淳 1994 「左京第297次調査略報」『長岡京市埋蔵埋蔵文化財センター年報平成4年度』（財）長岡京市埋蔵文化財センター

亀田 博編 1978 「大福遺跡」 奈良県立橿原考古学研究所

國下多美樹ほか 1997 「鶏冠井遺跡」 （財）向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会

神戸市教育委員会 1997『新方 現地説明会資料』

斎藤明彦・松本洋明 1995『坪井遺跡から出土した弥生前期の土器棺』『みずほ』15 大和弥生文化の会

多賀茂治編 1995『玉津田中遺跡』3 兵庫県教育委員会

丹治康明編 1991『雲井遺跡 第1次発掘調査報告書』神戸市教育委員会

中村 弘編 1991『東武庫遺跡』兵庫県教育委員会

林屋辰三郎編 1983『史料京都の歴史』2 平凡社

福永伸哉 1991『開田遺跡』『長岡京市史 資料編一』長岡京市役所

松尾信裕ほか 1983『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ (財)大阪市文化財協会

松本洋明 1997『奈良県橿原市・坪井遺跡から出土した縄文晩期系土器の類例』『古文化論叢』伊達先生古稀記念論集刊行会

松本正信・加藤史郎 1978『袋尻浅谷』揖保川町教育委員会

森 浩一・田中英夫 1953『堺市黄金山遺跡出土の弥生式土器』『古代学研究』33 古代学研究会

森下大輔・今 芳也 1997『河高・上ノ池遺跡』加東郡教育委員会

山中 章 1987『10 長岡京跡左京第143次(7AN FTB-4地区)発掘調査概要』『向日市埋蔵文化財発掘調査報告書』21 向日市教育委員会

山本輝雄 1995『縄文晩期の土器棺墓について』『長岡京市埋蔵埋蔵文化財センター年報平成5年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター

渡辺 昇ほか 1989『半田山』兵庫県教育委員会

【補記】

成稿後、いくつかの文献の漏れと、新出資料があるのに気付いたので、ここで補っておきたい。まず新出資料についてであるが、岐阜県大垣市荒尾南遺跡で弥生時代前期の方形周溝墓1基が発見された。弥生時代終末の方形周溝墓4基に隣接して立地する5号方形周溝墓(SZ5)は、周溝最下層から条痕文土器壺1点と叩石1点が出土した(千藤 1998)。検出されたのは、方形周溝墓の一辺のみである。

この方形周溝墓がどのようなルートで大垣市まで波及したのかという問題について考えてみると、一つには尾張地方との関係、つまり山中遺跡や朝日遺跡の方形周溝墓を構築した集団との接触が考えられる。もう一つは、近江湖北との関係、つまり塚町遺跡の方形周溝墓を構築した集団との接触によるものが考えられる。山中遺跡・朝日遺跡の周溝墓の平面形態が、四隅の切れる形であるのに対して、塚町遺跡のは全周するタイプである。荒尾南遺跡では、周溝墓の一部しか検出されていないため、平面形態は不明である。しかし、今後美濃地方から、群を構成する初期周溝墓が発見される可能性は高く、注目されよう。

また、韓国寛倉里遺跡について、日本で紹介・解釈されている文献が、いくつか存在することに気付いた。しかしながら、これはいずれも本報告がなされる以前で記されたものであり、日本の周溝墓との関係については、はっきりと明言されていない。

【補記・文献】

大塚初重・石野博信ほか 1998『シンポジウム 弥生時代の考古学』学生社

千藤克彦 1998『荒尾南遺跡』岐阜県・(財)岐阜県文化財保護センター

山岸良二 1996『韓半島での本格的な方形周溝墓群の発見』『東邦考古』20 東邦考古学研究会